

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

過去指示 después que と después de que
における「抽象的時間関係」と叙法の相関性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): despues que, despues de que, 情報構造, 情報, 叙法 キーワード (En): 作成者: 辻井, 宗明 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006196

過去指示 *después que* と *después de que* における 「抽象的時間関係」と叙法の相関性について

辻 井 宗 明

要 旨

以前の論文で、過去指示 *después de que* に「抽象化された時間関係」を設定する機能があることに注目し、それが同従属節語句がもつ副情報の提示機能につながるきっかけになったのではないかと推論したが、今回は *después que* に関する様々な数量的調査や、「新聞」「雑誌」と「書籍」における両語句の異なりを比較検討して全体を見直した結果、接続法化は「書籍」よりも「新聞」「雑誌」が、*después que* より *después de que* が進んできたのがわかった。また、「新聞」「雑誌」において「抽象化された時間関係」の用法が多いこともわかった。その上、統計的には *después que* から“*de que*”へと形態統語的变化と後者の接続法化が同調しており、“*de que*”によって法環境の変化が起ったように見える。このことから、「*después de que* + 接続法」が情報構造的意味の提示機能をもつようになったきっかけを、“*de que*”への形態統語的变化と「新聞」「雑誌」における時間的意味の抽象化であると結論した。

キーワード： *después que*、*después de que*、情報構造、副情報、叙法

0. はじめに

辻井 (2003) において過去指示 *después de que* の法選択について考察した。ここで言う「過去指示」とは、叙実性の高い文法環境、すなわち、次の例 (1) のように *después (de) que* 内の動詞が過去の事態を指示し、現実に起きたことが前提されるようなものを指す。

- (1) Poco después que el Congreso de los EE.UU. *aprobara* ese proyecto, comenzaron a oírse fuertes críticas y aparecieron numerosos detractores de la idea.

(1996, *Hombres en el espacio. Pasado, presente y futuro*)

同論文で考察されたのは次のようなことであった。すなわち、従来、*después de que* を含む「時の副詞節」における法選択の基準は、事態に対する話者にとっての「経験」か「未来」である。すなわち、叙法が事態に対する真偽判断を担っていたといえる。しかし、主節と、*después de que* を従属節語句とする従属節の意味関係を綿密に観察すると、「～の後」という

純粋な時間関係だけでなく、比喩的な時間関係、あるいは「抽象化された時間関係」という意味を示すことがよくあることに気がついた。具体的には、después de que 節が、主節の命題に対して、時間関係を内包した付帯状況や因果関係などの広い意味を形成するのである。そして、数量的調査の結果「抽象化された時間関係」と接続法使用の相関が見られたことを受けて、そのような重層的な意味の設定には、事態の真偽性に言及しない接続法がふさわしいのではないか、そのことが después de que の接続法使用を方向づけた理由のひとつではないかと結論した。

本論文でも、上記の叙法論に関する結論に変更を加えるつもりはない。ただ、以前の論文では después de que のみを扱い、después que には言及しなかったので、今回は、después que に関する数量的資料を新たにいくつか付け加え、上記の結論を確認、および補強する目的で、después (de) que 全体を再考する形で考察を進めたい。そのために、辻井 (2003) や辻井 (2005) で用いた資料も適宜再利用し、具体的には次の3点から考察を行いたい。

- (i) después que と después de que の意味機能の分化と変遷。
- (ii) 両形式における叙法。これに関しては次のふたつの観点から考察する。
 - (ii) - 1 después que と después de que の形態統語的变化と叙法。
 - (ii) - 2 (i) で見た después que と después de que の意味機能の変遷と叙法。

1. después (de) que の意味機能の分化と変遷

辻井 (2003) では、新聞・雑誌などの報道記事における después de que の特殊な意味機能を指摘したが、これについてももう少し詳しく論じてみよう。

- (2) El famoso centrocampista, que jugó en Brasil, México, Italia y España, murió en el acto después de que el vehículo en el que viajaba *se estrellara* contra otro coche en una avenida de alta velocidad del lujoso barrio Barra de Tijuca, al oeste de Río de Janeiro.

(La Vanguardia, 16/09/1995)

「ブラジル、メキシコ、イタリア、スペインでプレーしたその有名なミッドフィールダーは、Río de Janeiro の西にある高級住宅街 Barra de Tijuca の高速道路を走行中、他の車と衝突して (衝突した後) 即死した」(辻井 2003, p.72)

非常に奇妙な文である。普通、ふたつの事態が連続して起り、純粋に時間の経過に沿った行為を描写したい場合 (因果関係などの論理的意味に言及しない限り)、順接的に並列されたり、cuando で示されるものである (Sonó el despertador y me desperté. / Cuando sonó el despertador, me desperté. 「目覚ましが鳴って目が覚めた／鳴ったとき目が覚めた」)。そのような場合に、一般的に、ふたつの事態間に時間的前後関係が存在するからといって después (de) que

が使用されることはない。*después (de) que* の使用が許されるのは時間的前後関係に焦点が置かれたときだけである (*Generalmente me despierto antes de que suene el despertador, pero ayer me desperté después de que sonó (sonara) el despertador.* 「普通目覚ましは鳴る前に起きるのだが、昨日は鳴った後で (鳴ってから) 起きた」)。

例文 (2) で感じる奇妙さはここにある。「他の車と衝突した」と「即死した」という連続した事態であり、なおかつ、両事態間にある時間的前後関係に特に焦点があたっているとは思えない状況で *después de que* が使われているのである。

次の (3) の文はどうか。

- (3) El desenlace de la anterior carrera, en Silverstone -donde ambos pilotos debieron abandonar después de que Hill chocara con Schumacher cuando pretendía adelantarle y ocupar el primer lugar- deterioró aún más la relación entre los dos pilotos.

(*La Vanguardia*, 30/07/1995)

「前回のレース——Hill が Schumacher を抜いて前に出ようとしたところ接触したので (接触した後)、両レーサーとも棄権しなければならなかった——の結末は、ふたりの関係を悪化させた。」(辻井 2003, p.75)

ふたつの事態、すなわち「Hill が Schumacher の車に接触した」と「ふたりとも棄権した」が、例文 (2) のように短時間に連続して起ったものではないし、また、時間的前後関係に焦点があたっているものでもない。確かにこの *después de que* が示す事態は、時間的前後関係 (主節に対しては「前時性」) なのであるが、ここで扱われているのは、純粋な時間的關係ではなく、それがもっと抽象的な領域にまで広げられており、両事態の論理的關係 (この場合は「原因」) にまで広げられていると考えられる。

まとめると、時事文の中で使用される *después de que* には、大きく分けてふたつの意味機能が存在する。すなわち、ふたつの事態間に存在する前後関係に焦点があたった場合の純粋な時間関係 (「～の後」)。そしてもうひとつは、焦点があたっていない時間的前後関係 (並列的に連続して起る行為「～して・・・」「～を受けて・・・」)、及び抽象的な時間関係である。そしてこの抽象的時間関係には、「原因」(「～ので」) や「逆接」(「～だけれども」) などの論理関係がある。前者を「焦点化時間関係」(以降「時間関係」)、後者を「非焦点化時間関係及び論理関係」(以降「論理関係」) と呼ぶことにする。

1.1. 「新聞」「雑誌」における *después que* の意味機能¹⁾

今回は、*después que* においても、「論理関係」に代表される抽象的な時の前後関係が観察できるのか調べてみた²⁾。

- (4) El candidato socialista, Gabriel Urralburu, fue designado ayer presidente del Gobierno

de Navarra después que, transcurridos los dos meses que prevé la ley después de la primera votación del proceso de investidura, ninguno de los candidatos hubiera obtenido la confianza de la Cámara. (*El País*, 02/10/1987)

「法令が定める任命手続の第1回投票後2ヶ月が経っても、候補者の誰も議会の信任を得ないまま／得ないのに（得ない後で）昨日、社会党候補 Gabriel Urralburu がナバラ自治政府首相に指名された。」（逆接）

- (5) Una mujer quema su casa con marido dentro. Un hombre de unos 45 años resultó muerto la pasada madrugada en la localidad sevillana de Villafranco del Guadalquivir, al parecer después que su esposa prendiera fuego a la vivienda en la que dormía. (*La Vanguardia*, 24/10/1994)

「女が自分の夫を自宅に置いたまま放火。昨夜未明、セビージャ郊外の Villafranco del Guadalquivir において自宅で寝ていた45歳ぐらいの男性が死亡した。妻が自宅に火を放ったため（放った後）であるとみられる。」（原因）

1990年代、80年代、70年代の各ひとつずつの例文をあげたが、やはりここでも「論理関係」が確認できた。興味深いのは、例文（4）で、después que 節が否定文（ninguno de los candidatos hubiera obtenido...）になっており、明らかに具体的な時間関係ではなく、sin que, puesto que, a pesar de que のような抽象的時間関係、すなわち論理関係を示していると考えられる。

さて、これらがどれぐらいの頻度で使われているかを CREA と CORDE において 1970年代から1990年代までの「新聞」（“Periódicos”）と「雑誌」（“Revistas”）のジャンルに限って、主節に対する従属節の「時間関係」と「論理関係」の割合を年代ごとに調査してみた（以降、すべての表における括弧内は実例数を指す）³⁾。

表 1：después que における主節－従属節の意味関係（「新聞」「雑誌」）

	「時間関係」	「論理関係」	不 明	合 計
1970-79	67% (6)	33% (3)	0% (0)	100% (9)
1980-89	65% (11)	35% (6)	0% (0)	100% (17)
1990-99	52% (16)	45% (14)	3% (1)	100% (31)

例文数が限られているので決定的な結論は出せないが、ひとつの傾向と言えることは、「論理関係」の意味機能は比較的頻繁に見られ、また 1970 年代から 1990 年代にかけて増加してきているということであろう。ただ、その確認にも1970年代より以前がどうであったのかを知りたいところであるが、コーパスのデジタル化の遅れか、例文のヒット数が極めて少ない。なんとか幅をひろげて調査してみたが、1500年～1969年でヒットしたのは1600年代の4例のみ

であった⁴⁾。そしてその意味関係を見てみると4例すべて純粋な「時間関係」であった。これらのことから、*después que* のもつこの「論理関係」の意味機能は比較的新しいのではないかと推測できる。

1.2. 「書籍」における *después que* の用法⁵⁾

表2： *después que* における主節－従属節の意味関係（「書籍」）

	時間関係	論理関係	合 計
1970－79	100% (16)	0% (0)	100% (16)
1980－89	100% (24)	0% (0)	100% (24)
1990－99	90% (18)	10% (2)	100% (20)

さて、上記のような主節と従属節の意味関係は、新聞・雑誌以外でも認められるのだろうか。対象を「書籍」（“Libros”）にしてひとつひとつの例文の意味をとって年代別に統計をとってみた。表2で見るように、1980年代までは「論理関係」の用法が皆無であり、90年代に少し見られる程度である。表に示されたこの「論理関係」の2例を観察してみよう。

- (6) ... varios pilotos paquistaníes fueron muertos a cuchilladas en los arrozales por sus propios compatriotas cuando se lanzaron en sus paracaídas después que los antiaéreos del otro lado alcanzaran los aviones. (1995, Leguineche, Manuel, TÍTULO: *El camino más corto. Una trepidante vuelta al mundo en automóvil*.)

「何人ものパキスタン人パイロットが敵の高射砲によって飛行機が撃ち落とされたため（撃ち落とされた後）落下傘降下し、そのとき水田において同国人に刺殺された」（原因）

- (7) Ello le calificó para ser el primer ministro diplomático norteamericano en la ciudad de México, después que rechazaron este puesto otros “con mayor experiencia política”.

(1994, AUTOR: Ortiz-Armengol, Pedro, TÍTULO: *Aviraneta o la intriga*.)

「そのことにより、他のもっと政治経験豊かな人達がこのポストを拒否したのに（拒否した後）、彼はメキシコシティにおける北米外交首相として評価された。」（逆説）

さて、この(6)と(7)の2つの例文であるが、メディアが「書籍」であっても、その内容は歴史や政治に関する客観的な描写であり、新聞や雑誌の報道記事とさほどかわりはない。新聞や雑誌の中心が報道であるとするなら、報道記事というものは、限られた時間の中で出来事をできるだけ客観的に捉えて報道するのが基本であり、どちらかというと不注意な言語使用の場であると言われている⁶⁾。それに対して本の中心を文学とするなら、それは芸術的な技巧を凝らすことが求められ、また時間も充分にかけられる注意深い言語使用の場であるといえる。あるいは逆に、新聞や雑誌の記事においては主節と従属節の論理関係に言及することを故意に

避けようとして、時間的前後関係という客観的な事柄だけを表現しようとするのかもしれない。そのような場では、たとえば従属節が主節の原因であることを表わす *puesto que* や *porque* より *después (de) que* を使って時間関係として表現する方が都合がいいのではないだろうか。また、純粋な時間関係を含め、論理関係である「原因」「逆接」をも「抽象的時間関係（前時性）」としてひとつの従属節語句で表わすことができれば、文体論としての善し悪しは別にして、時間的制約や客観的事実の報道という立場からは非常に機能的であるといえる。

したがって、すべてをひとつの抽象的時間関係でひっくるめて表現し、具体的な解釈を文脈に依存させることから、従属節が主節に対して時間関係を表わしているのか、原因などの論理関係に焦点をあてているのか判断がつかない例が見られることがある。

- (8) Pujana dimitió el 12 de mayo de 1994, después que el fiscal presentara acusación contra él. (*La Vanguardia*, 16/07/1995) (不明)

「Pujana は1994年5月12日、告発を受けて（受けた後）辞任した」

さて、Pujana 氏は「（告発を受ける前ではなく）告発を待って／告発の後で辞任した」のか、「告発を受けたことが原因で辞任した」のか、聞き手（読み手）には不明である。文脈がなければ、この *después que* を文字通り「～の後」ととることもできるし、原因として *puesto que* ととることも可能である。いわば、意識的であれ無意識的であれ、報道が客観的事実を伝えるのを趣旨とするならば、便利であるともいえる表現である。おそらく、これが「新聞」「雑誌」でこの用法が頻繁に用いられる要因であろう。もっとも、そうすることによって紋切り型の文が増えることになり、それが否定的な意見につながるのかもしれない（注6参照）。

1.2.1. 「時間関係」と「原因」の関係

1.2.1.1. 中世における原因を意味する *después que*

そもそも時間を表すはずの従属節語句が、原因などの論理的抽象関係を表わすのは突発的な事象なのだろうか。あるいは、論理的に相関性のあることなのだろうか。それを証明する現象を古いスペイン語に例を見いだした。

「原因」と「後時性」（主節に対する従属節の行為としては「前時性」）の相関は、現代では原因を表わすようになっている *pues que* が、古典ラテン語の「後時性」を表わす *POSTQUAM*（「～の後」）を起源としているという語史上の事実でも確認できるであろう⁷⁾。Corominas y Pascual (1981) によれば、元の後時性の意味とともに、*Cantar de Mio Cid* においてはすでに原因の意味で用いられていたようである（“*pues*” の項を参照 p.683）。そして、その後は、他の後時を表わす従属節語句である *de que*, *desque* とは違って、中世スペイン語においては、ほとんど原因の意味で使われていたようである⁸⁾。

さて、このような *pues que* に *después que* は由来するとされている⁹⁾。その使用例を観察す

ると、後時性を表現する時期は重なっているものの、*pues que* が後時性表示の機能を *después que* に引き渡し、自らは専ら原因を意味するようになったようである。その併存期である *Cantar de Mio Cid* に、*después que* も原因として使われていることが Menéndez Pidal (1976, § 196, P.395) や García de Diego (1970, p.412) によって指摘されている。

- (9) Dixo el rey: mucho es mañana,
omne ayrado, que de señor non ha graçia,
por acogello a cabo de tres sedmanas.
Mas después que de moros fo, prendo esta presentaja;
aun me plaze de mio Çid que fizo tal ganança.
(*Cantar de Mio Cid*, 884)

- (10) 王は答えた―「それは早すぎる。主君の忌諱に触れて追放の刑に処されたものがたった3週間で赦しを得られると思うのか。ただ モーロから奪った戦利品は貰っておこう。余もシッドのこの度の勝利を嬉しく思うからじゃ・・・(牛島他 1994, p.76)

次の現代スペイン語訳を見ても、問題の *después que* の部分は、*por* を使って原因として解釈されているのがわかる。

- (11) Muy pronto es – dijo el rey – para acoger al cabo de unas cuantas semanas a un desterrado que perdió la gracia de su señor. Pero acepto el presente, por venir de patrimonio de moros, y aun confieso que me alegro de las ganancias del Cid.
(Prosificación moderna de A. Reyes, 1988)

また、Monteiro Louzao (1999) が見つけた次の *Cantar de Mio Cid* における例などは、ここにとりあげた報道文に特徴的な用法と非常によく似ている。

- (12) Grant fo el día por la cort del Campeador, después que esta btalla vençieron e al rey Búcar mató; (*Cantar de Mio Cid*, 2475)
(13) 「ブカルを殺して大勝利を収めたこの日カンペアドルの宮廷は喜びに湧きかえった。
(牛島他 1994, p.202)」
(14) Gran día fue aquél en la corte del Campeador por la victoria alcanzada y la muerte del moro Búcar. (現代語散文体訳、A. Reyes, 1988)

すなわち、「この戦いに勝った後 (ので)、カンペアドルの宮廷ではこの日大変であった」という意味であろう。

中世における *después que* の「原因」としての意味機能はそれほど頻繁ではない¹⁰⁾。ただ、その起源であろう *pues que* がそうであったように(「時間関係」から「原因」の意味に移行)、また、*después que* が *pues que* と十分な機能分化が進んでいないときに前者の「原因」を意味する例が見られた事実からわかるように、「後時性」を意味する従属節語句、すなわち、主節

に対する従属節の「前時性」と「原因」の間には非常に強い相関性が存在することが確認できたのではないだろうか。

1.2.1.2. 「時間関係」と「原因」の論理的相関性

Méndez Gracia de Paredes (1995) は、*pues que* や *después que* のような従属節語句は、「時」(temporalidad) と「原因」(causalidad) の相互干渉 (interferencias) を引き起こし、主節の行為に対する従属節の前時的行為が、「原因」と解釈されることがしばしば起るのだと指摘している。

El hecho de que estos subordinantes introduzcan una acción, la subordinada, anterior a una segunda acción, la principal, favorece las interferencias entre 《temporalidad》 y 《causalidad》, que se hacen más intensas porque, a menudo, una acción anterior se interpreta como el motivo que origina la segunda acción. (p.142)

また、「時」から「原因」への移行の意味過程として、次のように述べている。

...hay una explicación semántica...que permite ciertos desplazamientos del 《tiempo》 a la 《causa》: una relación temporal se convierte en consecuencia temporal (《entonces》), interpretable también como consecuencia conceptual lógica (《luego》), y de ahí se pasa insensiblemente a la consecuencia lógica (《pues》, 《en consecuencia》) y a la 《causa material》. (p.142)

すなわち、まず、時間的關係が時間的結果 (entonces : 「そのとき・それから」) に、そしてそれは概念的な論理的结果 (luego : 「それで」) として解釈され、そこから無意識的に論理的结果 (pues, en consecuencia : 「だから」) や「実質的な原因」に移行するのだとしている。

1.3. después de que の意味機能

después de que の意味機能については、辻井 (2003) において 1990年代の「新聞」「雑誌」として統計資料を提示している (p.73)¹¹⁾。それによると、主節と従属節の意味関係は、60例のうち、「時間関係」が66.7% (40例)、「論理関係」が33.3% (20例) であった。表1で見た *después que* の52%対45%とさほど変わらない数値である。

そして、今回は「書籍」における調査を実施したが、その結果は表3にあげた通りである。70年代は26例しかヒットがなく、80年代と90年代 (95年～96年) は例文をランダムに選び30例に絞った。

「論理関係」は次にあげる通り1995-96にのみ、それも2例しかない。

表 3 : después de que における主節－従属節の意味関係（「書籍」）

	「時間関係」	「論理関係」	合 計
1970－79	100% (26)	0% (0)	100% (26)
1980－89	100% (30)	0% (0)	100% (30)
1995－96	93% (28)	7% (2)	100% (30)

- (15) ...entre ocho y diez millones de personas viven en condiciones de pobreza, después de que durante la última década crecieran notablemente las diferencias entre pobres y ricos. (1995, AUTOR: Ramírez Codina, Pedro J., TÍTULO: *David contra Goliath. Jaque mate al felipismo*)

「ここ10年の間に貧富の差が著しく広がったため（なった後）、800～1000万の人々が貧困状態で生活している」（原因）

- (16) ... después de que Melchor Miralles, con un fotógrafo de Diario 16, cogiera in fraganti al colaborador de Interior Francisco Paesa presionando a la novia de Michel Domínguez, y el juez, a la vista de las pruebas y de la declaración de la chica, ordenó detenerle, resultó que los policías lo perdieron en un semáforo. (1995, AUTOR: Ramírez Codina, Pedro J., TÍTULO: *David contra Goliath. Jaque mate al felipismo*.)

「Melchor Miralles は、Diario 16 の写真から、Michel Domínguez の恋人をたたいて Francisco Paesa の共犯者を現行犯逮捕し（たが／した後）、裁判所は証拠と女の証言から彼の逮捕を命じたが（命じた後）、結局警察は信号で彼を取り逃がしてしまった」（逆接）

やはりここでも表 2 で示した después que（「書籍」）のときと同じように、「論理関係」の意味での使用は限られ、使われたとしても、新聞などに特有の報道記事風の記述に限られるということができ、小説などでは依然として伝統的な「時間関係」の意味で使われるのが普通だと言えるであろう。

2. 過去指示 después (de) que と叙法

次に両従属節語句と叙法の関係を見てみよう。ここでは2つの観点から考察する。ひとつは形態統語と叙法。もうひとつは従属節の主節に対する意味機能と叙法の関係である。

2.1. 形態統語的変遷と叙法¹²⁾

2.1.1. 過去指示 después de que における法の変遷

表 4：過去指示 después de que における法の変遷（「書籍」）

	直説法	接続法
1950年代（1950～59）	66.7%（4）	33.3%（2）
1960年代（1960～69）	45.0%（10）	55.0%（12）
1970年代（1970～79）	55.5%（5）	44.4%（4）
1980年代（1980～89）	17.0%（10）	83.0%（49）
1990年代（1990～99）	2.8%（4）	97.1%（136）

辻井（2003）

表 5：過去指示 después de que における法の変遷（「新聞」「雑誌」）

	直説法	接続法
1970年代	6.9%（5）	93.1%（67）
1980年代	6.0%（11）	94.0%（173）
1990年代	1.6%（1）	98.4%（62）

全体的に見る前に、まず個別のふるまいを、辻井（2003）で行った研究結果をふまえて確認しておく、使用される法の変遷については次のようなことが言える。

表 4 を見るとわかるように、70年代にほぼ同割合であったものが、80年代には逆転して接続法の使用が増加している¹³⁾。90年代にいたっては、他の「時の副詞節」が過去指示（経験）の用法としてもっている有標／無標性がまったく逆転しているとも言える。これは「書籍」だけの統計であるが、資料体を「新聞」「雑誌」に替えると、接続法の無標性はもっと古い時代から始まっていることがわかる（表 5）¹⁴⁾。

叙実的である過去指示 después (de) que における接続法の使用が時事文から始まったとされていることから考えれば、「新聞」「雑誌」が「書籍」よりも接続法使用が進んでいて、早くから接続法が優位に使われていたのは納得できることである。

2.1.2. 過去指示 después que における法の変遷

さて、過去指示 después que についても同じように調べてみた。まず、después que は、法の使用についてどのような変遷をたどったのであろうか。ここでも CORDE 及び CREA で検索を行い、その割合を調査した¹⁵⁾。その結果が表 6 である。

表 6：過去指示 después que における法の変遷（「書籍」）

	直説法	接続法
1950年代（1950～59）	94.7%（36）	5.3%（2）
1960年代（1960～69）	80.0%（24）	20.0%（6）
1970年代（1970～79）	87.5%（14）	12.5%（2）
1980年代（1980～89）	28.0%（7）	72.0%（18）
1990年代（1990～99）	35.0%（7）	65.0%（13）

表 7：過去指示 después que における法の変遷（「新聞・雑誌」）

	直説法	接続法
1970年代	66.7%（6）	33.3%（3）
1980年代	23.5%（4）	76.4%（13）
1990年代	0%（0）	100%（31）

después que 自体の絶対数が少ない上、その中の過去指示なので必然的に数が限定されてくる。その中で傾向を見ると、表 6 では70年代まで直説法優勢で使われてきた法の割合が80年代には逆転して、接続法が多く使われているのがみてとれる。これは表 4 で見たように、después de que（「書籍」）における法の変遷と比べると、若干であるが接続法化が遅れているようにみえる。しかし、資料体を「新聞」「雑誌」にすると（表 7）、después de que と同様の圧倒的接続法優位の傾向を示す¹⁶⁾。ただし、1970年代には después de que ではすでに接続法化がかなり進んでいたが（93.1%）、después que においては33.3%と、接続法化が遅れていたようである。

このように、después de que と después que の叙法に関する推移を素直に見れば、después de que が接続法使用を先導していて、そのあとを después que が追随しているように見える¹⁷⁾。

2.1.3. después (de) que の形態統語的变化と叙法

辻井（2005）の調査において、después que と después de que の使用頻度を通時的に観察した結果、1200年代から1800年代まで、después que が優勢で90%以上の使用率であったが、1900年代になり después de que の使用が多くなりはじめた。そして1900年代を詳しく見ると、両者の使用率が完全に交代したのは、1970年代後半であることがわかった。

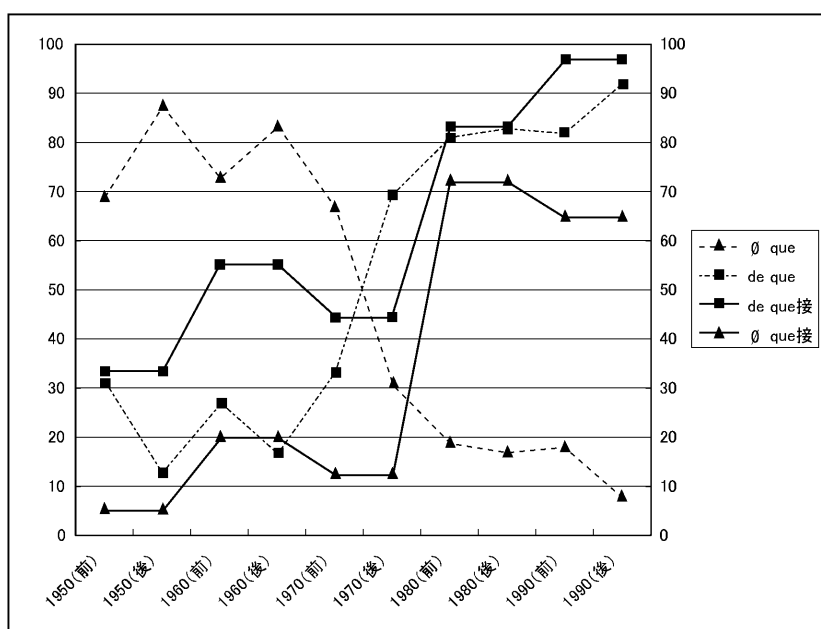
さて、después que から después de que へという変化と、ここまで観察した叙法の変遷を重ねると、表 8 のように興味深い結果が現われる（表では頻度の高い年代に網掛けを施した）。また、この表 8 の接続法使用率に焦点をあててグラフにしたものがグラフ 1 である¹⁸⁾。

表 8 : después que から después de que への変遷と法使用率 (『書籍』)

		1950年代		1960年代		1970年代		1980年代		1990年代	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
después que	直	94.7%		80.0%		87.5%		28.0%		35.0%	
	接	5.3%		20.0%		12.5%		72.0%		65.0%	
	(頻度)	69	87	73	83	67	31	19	17	18	8
después de que	(頻度)	31	13	27	17	33	69	81	83	82	92
	直	66.7%		45.0%		55.5%		17.0%		2.8%	
	接	33.3%		55.0%		44.4%		83.0%		97.1%	

(「頻度」の単位は%)

グラフ 1 : después que から después de que への変遷と接続法使用率



después de que は、筆者の CORDE における検索では、14世紀に 1 例の初出が見いだされるが、その後その使用率は非常に限られたものであった¹⁹⁾。そしてその傾向は20世紀になっても después que の優勢が続くのであるが、1970年代後半になって、después de que の使用が優勢になっている。さて、ここで目をひくのは、その後の1980年代から両従属節語句における接続法使用率がいきなり上昇していることである（全体的に después de que の方がひと足早い）。これはどう考えればいいのだろうか。この統計結果を素直にとりて、1970年代後半に después que がなんらかの原因で después de que という形態統語的变化を被り、そのことと接続法使用になんらかの連関があるのではないかという推測はできないだろうか。

2.2. 意味機能と叙法

表9: “después que + 直説法／接続法” における意味の分類 (「新聞」「雑誌」) 1970-1999

	「時間関係」	「論理関係」	計
接続法	56.5% (26)	43.5% (20)	100% (46)
直説法	70.0% (7)	30.0% (3)	100% (10)

表10: “después de que + 直説法／接続法” における意味の分類 (「新聞」「雑誌」) 1970-1999

	「時間関係」	「論理関係」	計
接続法	60.5% (26)	39.5% (17)	100% (43)
直説法	82.4% (14)	17.7% (3)	100% (17)

(辻井2003)

辻井 (2003) においては、después de que における接続法を、el hecho de que, aunque, de ahí que などの叙実的な統語条件においても指摘されているように、情報構造的意味を表わすものであると結論した。すなわち、接続法を使うと、従属節の情報を副情報として背後にのりやり、相対的に主節で表わされることがらに焦点があてられるのだということである。ここであらためて、その情報構造説を審議するつもりはない。ここでは、1 で検証した después (de) que の意味 (「時間関係」／「論理関係」と叙法との関係について考えてみたい。

表1 にあげたように、「新聞」「雑誌」における「después que による主節-従属節の意味関係」を、接続法／直説法別に分類してみた²⁰⁾。

表9 に見るように、相対的には直説法が使用されるのは時間的前後関係に多いと言えるだろう。辻井 (2003) で指摘したように、現代では主流になっている después de que では、直説法と「時間関係」の相関が顕著である (表10)²¹⁾。

ここで言えることは、después que も después de que も過去指示における元来の法 (直説法) では、元の用法 (「時間関係」) で主に使われていたが、接続法使用を獲得するにつれ、純粋な時間関係からもっと抽象的な領域にまで広がってきたということである。つまり、「時間関係」>「論理関係」>「副情報の提示」という経路をとったのではないか。別の言い方をすれば、元の「時間関係」から接続法を従えて情報構造的意味を担う前段階として、広く前時性を表わす抽象的な用法が発達したのではないだろうか。ただ、変遷の統計資料では、de をとることにより意味や法環境の変化が起っているのが見てとれるが、de を従えることによる論理的意味が未だに不明であることは付け加えておかななくてはならない。

3. まとめ

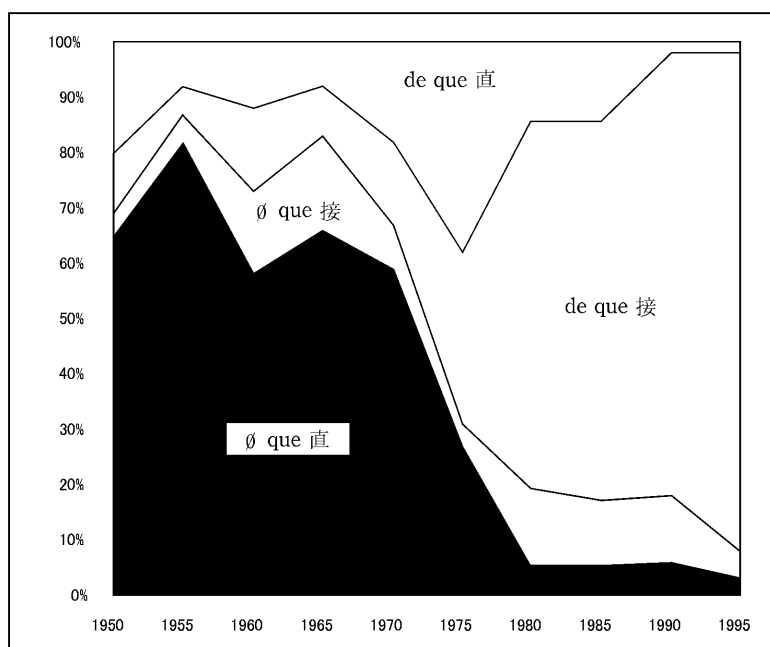
これまで考察したことを総合すると、次のようなことが言える。1970年後半を境にして después que と después de que の使用頻度が交代する。そして、その変化、すなわち después de que が多くなるのに呼応するかのように接続法の使用も多くなってきている。表8のそれぞれの従属節語句の使用頻度と法の偏りを相対的に計算しなおしたものが表11であり、グラフ化したものがグラフ2である。これを見ると、“después que + 直説法” から “después de que + 接続法” へという全体的な移行がよく理解できる。

表11：過去指示 después que と después de que の叙法推移

→19～	50年代	55年代	60年代	65年代	70年代	75年代	80年代	85年代	90年代
∅ que 直	65%	82%	58%	66%	59%	27%	5%	5%	6%
∅ que 接	4%	5%	15%	17%	8%	4%	14%	12%	12%
de que 直	20%	8%	12%	8%	18%	38%	14%	14%	2%
de que 接	11%	5%	15%	9%	15%	31%	67%	69%	80%

(∅ que = después que, de que = después de que)

グラフ2：過去指示 después que と después de que の叙法推移



また、新聞などの報道記事の文体に多く用いられる、いわゆる「論理関係」を意味する用法は、1970-90の después de que を調べると接続法と共に使われる方が多く、反対に直説法とでは、「時間関係」の方が多かった。この傾向は después que でも同じであった。1960年より以前の資料が手に入らないので、意味機能の分化を通時的に検証することはできなかったが、少ない例ながら1970年からの después que の資料を観察してみると、「論理関係」の例は増加の傾向にあり、その意味機能の発達は比較的新しいのではないかと想像できる（表12）。ただし、1970年代は用例数が少ないので、括弧を付して参考程度にとどめたい。

表12：過去指示 después que 接続法の意味機能（「新聞」「雑誌」）

	「時間関係」	「論理関係」
(1970年代)	(66.7%) (2)	(33.3%) (1)
1980年代	61.5% (8)	38.5% (5)
1990年代	53.3% (16)	46.6% (14)

después (de) que がこのような比較的新しい意味機能を獲得したことや、de que という形態統語変化を被ったことと、接続法使用による情報構造的意味の用法の獲得と関係があるという論理的証拠はない。ただ、「過去指示 después (de) que + 接続法」が始まったとされるまさにその時事スペイン語において、después (de) que の特徴的な意味機能（「論理関係」）が多用されるという事実は、そこに何らかの相関性を想起させるものである。また、接続法を用いることにより情報構造を重層化させ、もっぱら副情報を表わすようになるということが、después (de) que の語彙が元々もつ主節に対する時間的前時性を抽象化させて論理関係（原因、逆接など）を表わすということに由来するという考えも、それほど無理がないように思える。

では、時事文とは関係のない小説などの「書籍」において、どうしてそのような抽象的な時間関係を表わす用法が発達しないのか。小説などの芸術的な技巧の場においては、純粋な時間的前後関係と、因果関係などの抽象的前後関係はむしろはっきり区別されなければならないであろう。逆に、時事文であれば、書き手の意見が加わる因果関係などはむしろ避けられなければならないかもしれない。したがって、やはり「過去指示 después (de) que + 接続法」の過程が育まれたのは時事文においてであり、después que が de que という形態統語的变化を受けながら、「時間関係」>「論理関係」という経路をたどって、最終的な「情報構造的意味（副情報）」の提示機能が、今や広いジャンルで使われるようになったのではないだろうか。

確かに、ここであげた“de que”へという形態統語的变化と接続法使用の連関は、表8で見たように、1970年代後半に“de que”へという形態統語的变化が起り、その後すぐ80年代に después de que の接続法使用が増加し、それを追うように después que の接続法化が進んでいるという「状況証拠」にのみ依存している。しかしながら、2で観察した各従属節語句の

接続法使用率の変遷を別の基準に従って整理すると表13と14のようになる。

表13：「新聞」「雑誌」における両形式の接続法率

	después de que	después que
1970年代	93.1%	33.3%
1980年代	94.0%	76.4%
1990年代	98.4%	100%

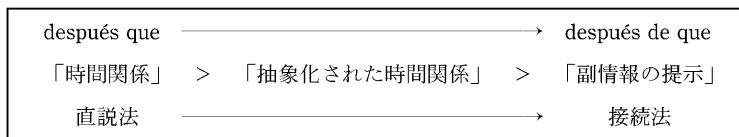
表14：「書籍」における両形式の接続法率

	después de que	después que
1970年代	44.4%	12.5%
1980年代	83.0%	72.0%
1990年代	97.1%	65.0%

「新聞」「雑誌」（表13）と「書籍」（表14）を比べると、やはり「新聞」「雑誌」の方から接続法化が起っていることがわかる。また、「書籍」における después de que は、después que に比べると、その接続法化は一步先を進んでおり、「新聞・雑誌」においても、1900年代は同程度であるが（98.4% vs. 100%）、después de que が増加した時期である 1970年代では、やはり después de que の方が接続法が多く使われており（93.1% vs. 33.3%）、1980年代でも94.0% vs. 76.4%である。つまり、接続法化に関しては、新聞などの時事文で始まり、después que よりも después de que において進んでいて、それが「書籍」に影響を与えたと考えるのが自然である。これと表8で見たような“de que”への形態統語的变化と接続法の増加を考え合わせると、この“de que”と接続法化の連関を想定することは可能なのではないだろうか。

これらすべてをまとめると図1で示したようなイメージが想定される。

図1：“después que 直説法”から“después de que”接続法への変遷のイメージ



すなわち、大きな流れとしては、“después que + 直説法”から“después de que + 接続法”へ変化しているのだが、その変化の理由のひとつが、この従属節語句の「純粋な時間関係」の設定から「抽象化された時間関係」（論理関係）の設定へという意味機能の変化である。そのような重層的な意味の設定には接続法がふさわしかったのであろう。そのことが después (de) que 節において接続法を使って情報構造的意味を設定することにも寄与したのではないか。そ

してまた、「純粋な時間関係」から「抽象化された時間関係」への変化と接続法化には、“∅ que” から “de que” へという形態統語的变化がかかっているのではないと思われる。

別の角度から言えば、そもそも「時の副詞節」というものは、叙法によって事態の真偽判断を行ってきたと考えられるが、過去指示 después (de) que 等のような叙実的な文法環境において、「陳述性」が低く「素材性」²²⁾が高いとされる接続法を使うことによってその真偽判断を中断し、結果、情報構造的にはそれを副情報として背後に追いやるのであろう²³⁾。ただ、筆者が疑問に思ってきたのは、そういうことが起りえたきっかけに関してであった。そこで提示したい可能性が、報道文における después (de) que がもつ「純粋時間関係」提示機能の抽象化であり、“∅ que” から “de que” への形態統語的变化なのである。

ただ、“∅ que” から “de que” への形態統語的变化と接続法化との連関は、「状況証拠」から出た仮説にすぎない。de が使われる意味とは何かという、主に複合前置詞におけるその役割に関する論理的考察が必要であろうし、形態統語的にも情報構造的機能でもよく似ていると思われる el hecho de que の el hecho que からの通時的研究も参考になるかもしれない。これらに関しては今後の課題としたい。

注

本稿は、2008年4月26日、大阪産業大学梅田サテライトキャンパスにて開催された関西スペイン語学研究会第310回例会での口頭発表に基づくものです。多くの貴重なご意見を賜り、厚く御礼申し上げます。

1) 本論文での例文抽出用コーパスには、Real Academia Española の “Corpus de Referencia del Español Actual” (CREA)、及び、Corpus Diacrónico del Español (CORDE) を使用している。どちらも地域 (“Geográfico”) は España で統一している。また、ここでいう「新聞」「雑誌」とは、CREA と CORDE におけるメディア (“Medio”) としての “Periódicos” と “Revistas” を指す。

2) después que の例文では、次のような「比較の対象」を表わすものは対象外としている。

Benazir llegó diecisiete años después que su padre a la presidencia de Pakistán. (AÑO: 1995, AUTOR: Leguineche, Manuel, TÍTULO: El camino más corto. Una trepidante vuelta al mundo en automóvil, PAÍS: ESPAÑA, TEMA: 05.Turismo, PUBLICACIÓN: Plaza y Janés (Barcelona), 1996)

3) 「不明」の文に関しては、例文(8)を参照。

4) 1641年、1642年、1643年、1644年のそれぞれ1例ずつで、すべて直説法であった。

5) ここでいう「書籍」とは、CREA と CORDE におけるメディア (“Medio”) としての “Libros” を指す。

6) Garrido Medina, (1997) や、Sánchez Arnosi のような、報道文に対する否定的な意見が多く見られる。(Garrido Medina, 1997, p.35)

- 7) Méndez Gracia de Paredes (1995), p.139
- 8) 同書、p.142
- 9) R. J. Cuervo (1954) は、ラテン語の DE-EX-POST が組み合わさったものであるとしているようであるが (“después” の項を参照 p.1164)、Corominas y Pascual はそれに疑義をとえ、起源は *desque* や *desde* から影響を受けた *depués* であると述べている (“*pues*” の項を参照 p.684)
- 10) No es muy frecuente encontrar ejemplos medievales de *después que* con este valor (causal), lo que auizá sea debido a la progresiva especialización de *pues que* para este fin. (Méndez Gracia de Paredes 1995, p.144
- 11) 当時の表は法ごとに数値をとっているが、ここでは叙法を問題にしていないので、数値を合算して提示している。法ごとの数値は、本論文の表11に示している。
- 12) *después (de) que* における -ra 形を直説法と捉える研究者もいるが (Navas Ruiz, 1986など)、辻井 (2003) でも議論したように、-se 形はもちろんのこと、-ra 形でも純粹な接続法としての使用であると捉えている。したがって、本論文では、*después (de) que* における接続法の種類 (-se 形と-ra 形) は問題にしない。
- 13) 基本的には辻井 (2003) であげた CORDE と CREA による統計結果であるが、コーパスに変更が加えられたためか、今回新たに検索しなおしたところについては、一部数値が異なっている。
- 14) これも辻井 (2003) にあげられた統計資料であるが、1940年代から1960年代まではヒット数が極端に低い、1970年代～1990年代までの統計である。詳しくは、辻井 (2003) pp.62-64を参照。
- 15) 調査条件は、Tema のみを “Todos” にし、Medio を “Libros” に、Geográfico は “España” に限定した。
- 16) 1950年代と1960年代には例がヒットしなかった。
- 17) 表1のところでも述べたように、1960年代以前の「新聞」「雑誌」は資料がないので割愛する。
- 18) 接続法率の数値は各年代を前半／後半を分けていないので、グラフでは同年代は同じ数値を入力してある。
- 19) 詳しくは辻井 (2005) を参照。当時の研究では、14世紀 (1300-1399) では *después de que* の例は0であったが、今回調べなおしてみると、1例のみ見いだされた。

Nuestro Señor consiente e es muy sofridor;
non acaloña al culpado luego en el feruor;
después de que le pide acorro el pecador,
non rrecabda en un día por ser muy rrezador.

(AÑO: c 1378 - 1406 AUTOR: López de Ayala, Pero, *Rimado de Palacio*)
- 20) 1990-99の不明の1例はここには入れていない。
- 21) “Libros” では、「論理関係」が少ないので、意味と法に関する統計は行っていない。
- 22) 福嶋 (1976)
- 23) Pérez Saldanya, (1999)、辻井 (2003)

参考文献

- Borrego J., Asencio J. G. y Prieto, E. (1985). *El subjuntivo*, SGEL, Madrid, España
- Cantar de Mio Cid*. 『わがシッドの歌』(1994) (牛島信明、福井千春訳) 国書刊行会、東京
- 出口厚実 (1982). 「スペイン語における叙法と法性」『大阪外国語大学学報』56、pp.1-16
- 江藤一郎 (1994). 「時事スペイン語における“接続法過去形”について」『外国語教育』20、pp.1-12、
天理大学外国語教育センター
- Fernández Ramírez, Salvador (1986). *Gramática española*, 2a ed. Tomo 4, (Ignacio Bosque 編), Arco, Madrid.
- 福寫教隆 (1976). 「イスパニア語接続法の研究—その本質的機能に関して—」*STUDIUM* 5 PP.67-71、
大阪外国語大学大学院研究室
- (1990). 「EL HECHO DE QUE 節について」*HISPANICA* 34、pp.97-112
- (1993). 「DE AHI QUE 構文について」『神戸外大論叢』44/6、pp.1-22
- (1998). 「aunque 節中の叙法について (1)」『神戸外大論叢』49/2、pp.29-43
- (2001). 『スペイン語記述文法』(イグナシオ・ボスケ、ビオレタ・デモンテ編) 第49章「叙法とモダリティー」、第50章「関係節・副詞節中の叙法」の要約および評。 *Lingüística Hispánica*, Anexo 1, pp.80-88, 関西スペイン語学研究会
- (2002). 「イスパニア語の『～ということ』節における叙法選択について」『神戸外大論叢』53/6、pp.1-25
- (2004). 「aunque 節中の叙法について (2)」『神戸外大論叢』55/6、pp.111-131
- (2007). 「イスパニア語の感情を表す語句に導かれる接続法について」『神戸外大論叢』58/3、pp.53-72
- 近藤由佳 (2007). 「después que 節における叙法」*HISPANICA* 51、PP.83-102
- García de Diego, V. (1970). *Gramática histórica española*, Gredos, Madrid (3a ed.)
- Garrido Medina, Joaquín (1997). *Estilo y texto en la lengua*, Gredos, Madrid.
- Lunn, Patricia V. (1995). “The Evaluative Function of the Spanish Subjunctive”, *Modality in Grammar and Discourse*, pp.429-449, Edited by Joan Bybee and Suzanne Fleischman, John Benjamins Publishg Company, Amsterdam/Philadelphia
- Méndez Gracia de Paredes, Elena (1995). *Las oraciones temporales en castellanomedieval*. Universidad de Sevilla.
- Menéndez Pidal, R. (1976). *Cantar de Mio Cid*. Obras Completas de R.Menéndez Pidal, Vol.I-III, Espasa Calpe, Madrid.
- Mosteiro Louzao, Manuel (1999). *Las conjunciones de causa en castellano medieval- Origen, evolución y otros usos*. Verba, Anexo 45, Universidad de Santiago de Compostela.
- Navas Ruiz, Ricardo (1986). *El subjuntivo castellano*, Colegio de España Madrid

- Pérez Saldanya, Manuel (1999). “El modo en las subordinadas relativas y adverbiales” *Gramática descriptiva de la lengua española* (dirigida por I. Bosque y Violeta Demonte), Tomo II, pp.3253-3322, Espasa, Madrid
- Porto Dapena, José Alvaro (1991). *Tiempos y Formas no personales del verbo*, Arco, Madrid.
- Reyes, Alfonso (1988). *Cantar de Mio Cid* (Prosificación moderna), Espasa Calpe, Madrid.
- Sastre, María Angeles (1997). *El subjuntivo en español*, Colegio de España, Salamanca.
- 辻井宗明 (2003). 「現代スペイン語における過去指示 después de que の法について」、『関西外国語大学研究論集』77、pp.61-80
- (2005). 「“después de que” は dequeísmo か —dequeísmo 研究への提言—」、『関西外国語大学研究論集』81、pp.45-57

電子資料

- Real Academia Española. Corpus de Referencia del Español Actual
(CREA<<http://corpus.rae.es/creanet.html>>) (2008年3月アクセス)
- . Corpus Diacrónico del Español (CORDE<<http://corpus.rae.es/cordenet.html>>)
(2008年3月アクセス)
- (つじい・むねあき 外国語学部教授)